

## 留学・研究計画書

氏名	佐藤 奈穂	留学機関名	カンボジア 国立経営大学
留学先国名	カンボジア	留学期間	西暦 2006 年 4 月 ~ 2008 年 3 月
研究テーマ (留学目的) 都市化が女性世帯主世帯の経済活動に与える影響 —カンボジア シェムリアップ州を事例として—			
研究テーマ (留学目的) の説明 (テーマの学術的・社会的意義についても必ず記載してください)			
<p>1. 研究目的</p> <p>夫の死亡, 離婚, 別居等の理由により, 女性が世帯主である世帯 (以下, 女性世帯とする) が, いかにして生計を維持しているのか, その世帯戦略の都市化による変化を明らかにすることを研究目的とする。</p> <p>カンボジアは長年の内戦, 特にクメール・ルージュ政権時代の圧制により, 男性が多く死亡し, 男性比率が低下している。そのため, 女性世帯は, 国全体で約 25% を占めている。現代カンボジア社会では, 女性世帯は常に社会的弱者として扱われ, 大きな社会問題とされているが, その実態は明らかにされていない。</p> <p>これまで申請者は, カンボジアの都市近郊農村の女性世帯がいかにして生計を維持しているのか, その経済活動の特徴と親族および共同体の役割について研究を進めてきた。今後は, シェムリアップという急速に都市化が進む地域において, その環境の変化が女性世帯の生計にどのような影響を及ぼすのかについて研究を深める。特にカンボジアの村落共同体および親族間の相互扶助, 支援機能に焦点を当て, 都市化によるそれらの変容が, 女性世帯の生計に与える影響を探究する。</p> <p>2. 研究の意義</p> <p>(1) カンボジア研究に関して</p> <p>カンボジアに関する研究は, 日本に限らず世界的にも他の東南アジア諸地域の研究に比べ, ある特定の分野 (遺跡・古代史研究等) を除いてきわめて限られたものとなっている。とりわけ, 1993 年の内戦終結後の農村社会を対象とした実証的な調査研究に基づく成果は非常に数少ない。そのため, 社会の基礎的な現状を把握することが, 今後のカンボジア研究の発展に大きく貢献するものと思われる。本研究では, 農村の経済活動, 経済構造および世帯, 親族構造, 共同体がどのようなものなのか, といったカンボジア社会の基礎構造の解明を通じて, カンボジア研究の発展に貢献したい。</p> <p>(2) 女性世帯に関して</p> <p>女性世帯の存在は, 内戦の影響によりカンボジアではとりわけ顕著な現象である。しかし必ずしもカンボジア特有の問題ではない。現在, 世界の全世帯の 3 分の 1 は女性が世帯主の世帯であると言われている。男性の死亡, 出稼ぎ, 離婚といった原因により, 多くの女性世帯が存在するのである。また, カンボジアでも内戦後の一時的な現象ではなく, 女性世帯の割合は近年, 再び増加傾向にある。インド, バングラデシュ等においてもジェンダー, 貧困, 開発の分野で女性世帯に関する研究が進められ, 今後注目される重要な研究課題である。</p>			

# 成果報告書

記入日 2007 年 4 月 28 日

氏名 佐藤 奈穂	留学先国名 カンボジア	所属機関 Center for Khmer Studies
研究テーマ： 都市化が女性世帯主世帯の経済活動に与える影響 ーカンボジア シェムリアップ州を事例としてー		
留学期間	2006 年 7 月	～ 2007 年 3 月
<p><b>はじめに</b></p> <p>本研究は、カンボジアにおける死別や離別により夫を持たない女性たちの世帯が、いかにして生計を維持しているのか、また都市化によりどのような影響を受けているのかを明らかにすることを主な目的としている。</p> <p>これまでの報告者の研究では、欧米諸国や日本では、夫を持たない女性たちの世帯は大きな経済的貧困に陥っているのに対し、カンボジアでは他の世帯とほぼ同等、あるいはそれ以上の経済所得を得ていることが明らかになっている。また、カンボジア国内に目を向けると、都市部ではそれらの世帯は貧困にあるのに対し、農村部ではその逆の傾向が示されている。ではなぜ、カンボジアの農村部におけるそれらの女性の世帯は、他の世帯に比して経済的貧困に陥らない傾向にあるのか。夫がいない女性たちは、夫という男性労働力を失うことにより、経済的に不利な状況に陥ると仮定した場合、何が彼女たちを支えているのかが疑問になる。本研究では、その理由を主に①経済活動、②親族関係、③地域内の社会関係資本から検討していく。</p> <p>その中から本報告では、農村部における③に焦点を当て、村内の人々の共同関係、相互扶助についてまとめ、それらが夫を持たない女性たちの生計を支える役割を果たしている可能性があるか否かについて検討したい。</p> <p><b>1. 調査概要</b></p> <p>調査地はカンボジアの北西部、シェムリアップ州プオック郡、プオック行政区 T 村である。シェムリアップ中心部はアンコールワットで有名な遺跡群のある観光地であり、近年急速な経済発展を遂げている。調査地はシェムリアップ中心部から西へ約 18 km に位置しており、都市近郊農村としてシェムリアップ中心部同様、急速な変化の中にある地域である。現在までの調査期間は 2006 年 11 月 23 日から 2007 年 3 月 13 日で、村内にホームステイを行い、定着調査を実施した。調査方法は主に参与観察および村民、村長、区役所職員へのインタビューである。調査村は、世帯数 203、人口 1092 人（内、女性 540 人）で、カンボジアの村落の中では、中規模であると言える。また、全世帯の約 7 割が稲作を主とする農業を生業としている。</p> <p><b>2. 村内組織</b></p> <p>まずは、村内に存在する組織とその機能についてまとめる。</p>		

#### (1) 村会議

村 (phum) の中には、村長 1 名、副村長 1 名が存在する。村会議は村長を中心に、必要に応じて開かれ、村会議の目的は主に行政からの連絡事項の伝達と稲作の水利に関する協議である。会議は村長からの一方向的な連絡の伝達という性格が強く、活発な意見交換が行われるような場ではない。内戦中は安全会議として頻りに会議が開かれ、ほぼすべての世帯から出席者があったが、現在は頻度も少なくなり出席者も全体で 10 人程度と会議そのものの意味が希薄になっている。

#### (2) 班

クロムと呼ばれる班は世帯を単位とし、近隣の世帯で構成されており、1つの班に約 10 世帯が属し、現在 20 の班が存在する。班の役割も主に行政的な連絡事項の伝達であり、それぞれの班に 1 人ずつ存在する班長が班員へ村会議の招集や村長からの伝達などを行っている。その他には水田の堤防や水路の修築等、灌漑に関する作業が班を単位に共同で行われることがあるが、定期的には実施されるものではなく、その他日常的な班を単位とした活動は見られない。村民の班への帰属意識は薄く、自分の世帯が何班に属しているのか知らない人も多い。

#### (3) 寺委員会

また村内にある寺院 (ロバウ寺 : Wat Lobauk) には、寺委員会がある。出家している年配の村民が同委員会に属しており、寺院で開催される祭事の運営、日々の僧侶の世話などが主な活動である。しかし、寺委員会は村民の実際の仏事以外の日常生活との結びつきは弱く、寺委員会や寺院が村民に対し何らかの福祉的な処置を取ることはない。

#### (4) 教育委員会

また村内にある小学校 (タートック小学校 : Sala bthmsekha tatok) には、教育委員会がある。同小学校には、近隣 4 つの村から児童が通学している。教育委員会には、学校の教員や児童の父母が属しており、学校の維持管理、児童の就学向上等を活動目的としている。現在の活動内容は、主に学校内設備の整備であり、委員が村々の家を回り、寄付を募り、机や椅子等の設備を整えている。貧困世帯の子供の教育支援等、子供たちを直接支援するような活動は行われていない。

以上が村内に見られる主な組織である。青年団や水利組織、女性グループ等の組織は存在しない。また、日本の農村における「頼母子講」や「無尽講」のような金銭による経済的相互扶助制度も見られない。

### 3. 農業における相互扶助

稲作における諸作業は世帯を基本単位として進められる。耕起および整地は主に夫や年長の息子が担当し、妻や娘が播種や移植、食事の準備を担当する。トラクター等の機械を用いた耕作が一部に見られるが、一般的には役牛 2 頭と人の手によって作業が進められる。収穫の時期にもまた世帯構成員総出の作業となり、刈取り作業は人の手によって行われ、男女ともに従事する。しかし、農繁期の田植えあるいは稲刈りの時期には、世帯員だけでは労働力不足となり、他世帯から労働力を補充する。労働力の補充方法としての主流は、賃金による人の雇用であるが、一部では金銭を伴わない相互扶助が見られる。そのような相互扶助の 1 つに、“プロヴァ・ダイ” (Provas dai) と呼ばれる労働力交換がある。日本の「ユイ」に似ているもので、賃金や米のやりとりではなく、労働交換のみが一連の過程において行われ

る。田植えと稲刈りの農繁期に、村内の世帯と日程を調整し、1日につき1世帯の水田において共同作業が行われる。労働力の交換はかなり厳密な等価交換であり、労働の価値は日数（時間）と人数で計られ、同時期内に交換されなければならない。また変則的なプロヴァ・ダイとして、耕起と田植えの労力交換も一部に見られる。男女や年齢の差はそれほど重視しないため、男性の少ない世帯が男性の労働力を補うことは可能であるが、特に何らかのハンディキャップを持った世帯に対し救済的な措置が取られることはない。数年前までは、主に貧困世帯でプロヴァ・ダイによる労働力補充が見受けられ、雇用賃金の支払いが困難な場合には一定の意味を与えていると思われた。しかし、現在ではそのほとんどが雇用労働に代替されている。

また賃金を伴わない労働力補充として、稲刈り作業の報酬として稲の藁を与える方法がある。従事者は稲を刈り、稲を踏んで脱穀を済ました藁を、刈り取った分だけ持ち帰る。藁は主に牛のえさとして利用される。

その他には、親族間で耕作用の役牛および水田あるいは畑作地の無償の貸し借りが一部で見られる。

#### 4. 冠婚葬祭における共同

個人宅や寺院で行われる冠婚葬祭の行事は、大勢の村民によるボランティアによって支えられている。行事の規模によって召集される人数も変わるが、個人宅での行事（法事、結婚式等）では、50人から100人程度の村民が行事の準備や片付けの手伝いに来る。事前に、主催者が村を回り、行事の規模に合わせて村民への参加と協力を求めて歩く。それぞれの家から少なくとも1名が共同作業に参加する。主に男性は会場の設営や炊飯、女性は会食のための調理、高齢者は宗教的な飾りの作成、10代後半から20代前半の男女は会食時の給仕を担当する。

これらの共同関係は「助け合い：chuoï knea」であると認識されていると同時に、来世のために功德を積むための1つの手段としても認識されている。

#### 5. その他の相互扶助

日常的に行われる相互扶助として、買い物の代行および市場での販売の代行がある。買い物の代行とは、少量の買い物が必要な時に、買い物へ行く近隣世帯の人に「ついで」購入してもらうのである。親族関係を問わず、広く行われる相互扶助である。購入代金は、買い物前あるいは後に支払われ、特に直接的なお礼はしない。また、市場での販売代行とは、市場で販売を日々の生業とする人に、とれた少量の野菜や魚を代理で販売してもらう、というものである。こちらも特に直接的なお礼はなく、販売代金は販売後に依頼主に渡される。

この他に、家で作った菓子、果物、野菜のお裾分け等は日常的に見受けられる。

#### 6. まとめ

以上、村内の共同関係、相互扶助についての概略を示した。

調査村で行われる共同作業、相互扶助は、突発的なものか特定の期間に限られたもの、あるいは家計に大きな影響を与えない程度の日常的なやりとりにはすぎないものが多くを占める。夫という男性労働力を失った女性たちが利用できる相互扶助として、農業における労働力交換があったが、最近では消滅しつつある。生計に影響を与えていると思われる相互扶助としては、家事労働を含めた労働力不足の補完としての買い物や市場での販売の代行、農地や役牛の無償貸し出しがあげられる。それらの相互扶助が、夫を持たない女性たちの世帯の生計に影響を与えている可能性は大きい。

実際の生計にどのような影響を与えているかは、今後、引き続き予定している同村での世帯調査により明らかにしていきたい。

## ■ 留学全般の感想

カンボジアという国に関心を持ち、研究を始めた動機の1つは「豊かさとは何か」というという問いに答えを得ることであった。いまだ明確な解答を得てはいない。しかし、今回の留学では世界の中でも「最貧国」の1つと言われるカンボジアで、多くの「豊かさ」を発見することとなった。

カンボジアの首都プノンペンには、首都とはいえ自転車で半日もあれば一周できるような小さな街だ。高層ビルやハイウェイも、海外資本の巨大なデパートもない。首都中心部から、車で30分も走れば、もうそこは農村で、地平線まで続く水田が広がる。日本と比べると、人の歩く速度も、車の走る速度も半分以下。ゆったりとした時間の流れは「貧困」だからと言うこともできるが、その方が「豊か」だと言うこともできる。

そんな小さなゆったりとした国での今回の留学では数多くの貴重な経験を得た。中でもやはり特筆すべきは、農村部でのホームステイの経験だろう。これまでも、カンボジアでの在住経験があったが、農村での定住は今回が初めての経験となった。

農村での暮らしは、容易なものではない。炊飯では薪を、水は井戸水や雨水を使う。川で洗濯、お手洗いは家の外にあり、夜の用足しは「おまる」を用いる。私的所有権の概念はなく「私の物はあなたの物、あなたの物は私の物」。そのため、外に出かけようとする、いつも私の靴がない。プライバシーの概念もなく、部屋を1つ与えてもらっているものの、人が自由に出入りし、自由に部屋の物を使う。

常に蚊とハエにつきまとわれ、ヤモリやゴキブリ、ねずみにコオロギ、かえるにサソリまで！多くの虫たち動物たちとの共存が迫られる。

正直なところ、いくら農村生活を楽しみにしていたとはいえ、そんな毎日にストレスを感じずにはいられなかった。しかし、逆にそんな私的所有権やプライバシーのなさ、自然の豊かさが、私を支えてくれたとも言えるし、この国の「豊かさ」の象徴でもあると言える。

村の家には壁がなく、家に鍵もかけない。子供が多く、少子化や高齢者介護の問題はない。子供は親だけが育てるものではなく、近所の人や親戚みなで育てるものだ。「育児ノイローゼ」なんて言葉はもちろんない。手を伸ばせばマンゴーの実が取れ、夕食は庭で育てた野菜を調理する。子供たちは川へ魚を取りに行き、食事の一品に加わる。

ホストファミリーが出かけてしまい、一人で家にいると、近所のどの家からも「家でご飯を食べて」と声がかかる。浮かない顔をしていると、小さな子供までが「どうかしたの？」と心配してくれる。村を歩いていると、5メートルに1度、「どこ行くの？」「ちょっと果物食べていけ」と村人から声がかかる。

この国のそんな「豊かさ」から少しでも多くのことを学ぶことが研究の大きな目的でもある。今回の留学では、そんな「豊かさ」を肌で感じる貴重な機会となった。この貴重な経験から、カンボジアや日本の研究にさらに貢献していきたい。

最後にこの場を借りて、このような貴重な機会を与えてくださったことに、再度お礼申し上げたい。